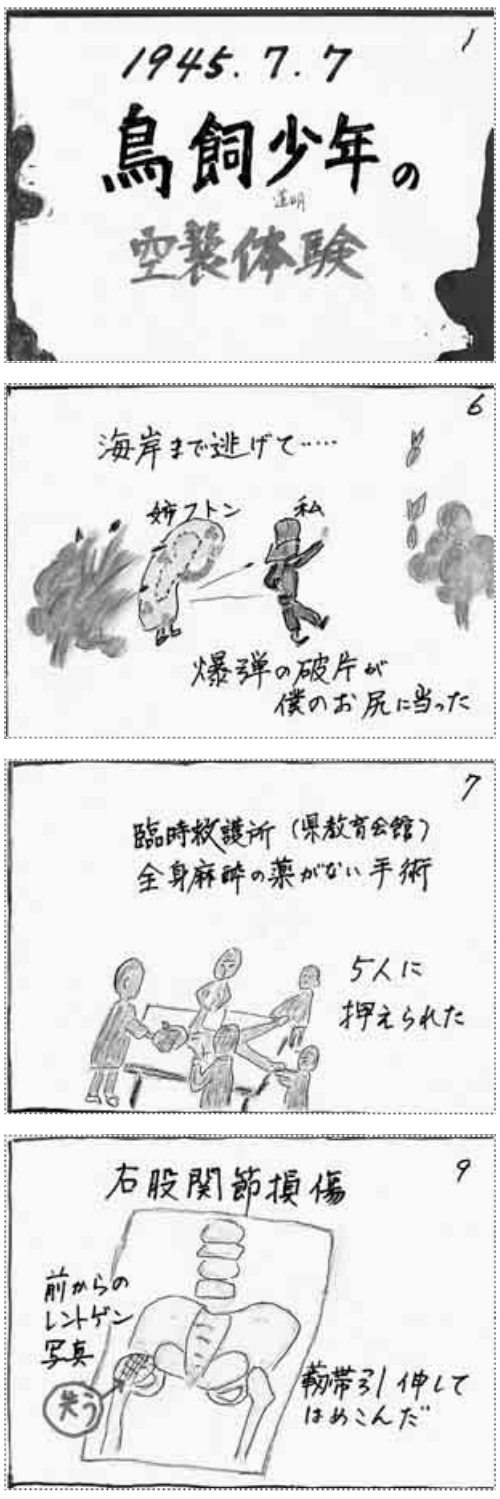
組合員数110,330人
支部数　941
読者数　67,470人
（5日現在）
〔連絡先〕☎03（5978）2751　FAX03（5978）2777
E-mail/honbu@nenkinsha-u.org
ホームページ/年金者組合と入力し検索して下さい。

年金者しんぶん

第380号　2021年8月15日（日）
（通巻第579号）
全日本年金者組合中央本部
〒170-0005東京都豊島区南大塚1-60-20天翔大塚駅前ビル
発行人　杉澤　隆宣　月刊1部100円（組合費に含む）
昭和57年6月30日第三種郵便物認可

空襲体験を16コマの絵に

千葉市空襲と戦争を語る会　戦傷補償の運動にも



16コマの絵から

千葉　年金者組合員ら取り組む

アジア・太平洋戦争末期、日本全土は激しい空襲を受け、50万人以上のいのちが奪われました。千葉市も1945年6月10日と7月7日に空襲を受けました。「千葉市空襲と戦争を語る会」が中心となって取り組んできた千葉市居住の年金者組合員らはこの5月、13歳で空襲にあい、大けがをした鳥飼道明さん（89）の体験を16枚の絵に表し、千葉空襲の伝承と、戦傷被害者の救済運動に役立てたいとしています。

「語る会」元事務局長の伊藤さん（元中央区支部長）＝右＝と現事務局長の竹久さん（中央区支部長）、平和記念碑の前で

「語る会」元事務局長　組合中央区元支部長）を中心とする年金者組合員の伊藤章夫さん（年金者

は、空襲の被害・戦争の悲惨さを伝えようと2009年に「証言集」を発刊、15年には犠牲者を調査し、その名を刻した「平和記念碑」を建設しました。

鳥飼さんの体験を聞いた伊藤さんは体験を絵にすることを提案、「語る会」の仲間が色鉛筆、クレヨン、マジックで16枚の絵にまとめました。

伊藤さんは「政府は『みんな大変だったのだから耐え忍べ』という『受忍論』を振りかざして空襲被害者には何の援助も補償もしていません。私たちが製作した絵を、現在進めている『生存戦傷被害者』救済の運動に役立たせ、平和を守る草の根運動に活かしていきたい」と語ります。

鳥飼さんの体験

千葉工業学校1年だった鳥飼さん（当時13歳）は7月7日未明、空襲にあい、海岸まで逃げたところで爆弾の破片がお尻に突き刺さりました。

麻酔薬もない臨時救護所で5人に押さえられて除去手術を受けました。右股関節損傷でじん帯を引き延ばしてはめ込みました。

医師からは「もう歩けない」と宣告されましたが、自力でリハビリし、歩けるようになり、工業学校を卒業。不自由な体で健気に働き、結婚して2人の息子を育て上げました。

8年前、「空襲と戦争を語る会」の催しに参加し、入会。年金者組合の「読者会員」にもなり、空襲体験を語っています。

年金者組合　ILOに申し立て

日本政府の年金削減　ILO条約違反を告発

日本政府に「勧告」を

年金裁判の争点になっている日本政府による年金削減（2013年から3年間で2・5%の削減）は、ILO（国際労働機関）102号条約に違反するとして、年金者組合はこのほど、ILOに対して日本政府に「勧告」するよう申し立てました。

ILO第102号条約は社会保障の最低基準を定めた条約で、社会権規約は「後退禁止原則」を定めています。日本政府は、ILO条約の遵守はもちろん、社会権規約や女性差別撤廃条約の無視や侵害も許されません。

年金者組合が申し立てた内容は、①「後退禁止原則」の遵守のほか、②厚生年金、国民年金受給額の改善、③女性の低年金の抜本的改善、④マクロ経済スライドを廃止し、減らない年金制度確立、⑤最低保障年金制度の創設、⑥社会政策に関して「年金者組合との協議」を、の6項目。

年金者組合は、国内法である憲法と国際法であるILO条約や社会権規約などを車の両輪として活用し、「最低保障年金制度の創設」をはじめ、若者も高齢者も安心して生活できる社会の実現を目指します。

2018年、ILO訪問時の写真

風雪

▼つい最近、ジョージア（旧ソ連・グルジア）の首都トリビシに日本人慰霊碑があることを知った。シベリア抑留者が黒海近くの地まで送られ亡くなったのだ。

▽死没者名簿に明治38年生まれ、階級は「兵」という人もいた。40歳近く、敗戦直前になって妻子から引き離され「満州根こそぎ動員」された方と思われる。帰国、家族再会を果たせず強制収容所で亡くなった無念はいかほどだっただろうか。

▼「竹槍では間に合わぬ」と東条批判の記事を書いた38歳の毎日新聞記者は懲罰で陸軍二等兵として召集された。「おかしい」との批判をかわすため、陸軍は記者と同世代の人たち250人を召集、死地硫黄島に送った。

▽「戦死」といえば、敵の銃弾に倒れたと兵士を思いがちだが、日本軍兵士の「戦死」は餓死、衰弱死、海没死が半数を上回る。故郷に残した妻子の名を呼びながら非業の死をとげた父、祖父を忘れまい。